

学びの風便り

リーディングスクール通信 17 R6.2.29

発行：松本市教育委員会 教育研修センター

参加者のみなさんの「振り返り」で織り上げる「フェス」の学び

実践校によるセッション

●各校の発表に共通していることとして、生徒の学びづくりを通して、職員集団が一つのチームになっていることを感じました。

●清水中学校さんのように学校としての学習の目標を焦点化し、身近な言葉で、キャッチフレーズようになって、生徒に浸透するようであれば、と思います。本校でも、「探究」をもっと噛み砕いて分かりやすい言葉を考えていきたいと思いました。

●田川小学校はコーディネーターの小嶋先生と研究主任の小林先生による、論と実際の取組の様子が分かりました。「子供の見方・捉え方」に焦点化し、写真をもとに語る研究会は魅力的でした。

●開智小学校の実践から、探究のサイクルの作成やチューニングの資料は参考になった。協働して学び続ける教師の姿や子どもの主体性に委ねる準備や意思、思考ツールの紹介などから、本校の研究にも取り入れたい要素がたくさんあった。

●寿小学校の発表で、自由進度学習を実践された1年生の担任の先生が、子どもの姿の成果だけでなく、教師(自分)自身の変化を話されていた。「普段の授業でも、理解の早い子を待たせる時間が気になるようになった。」「子どもの考えをどう考えるか、リーディングスクールの取り組みから松本の教師の力量が確実に向上していることを実感した。

●このリーディングフェスに集った皆さんが、各校の研究主任や研究実践を推進している先生方であり、会の雰囲気そのものが、探究的であると感じました。このような機会を、できるだけ多くの先生方に体験していただき、互いに学んでいきたいと思いました。

●明善小の発表が印象に残っています。幼保接続の視点から低学年の児童に託す、見守る、受容することを通して、主体的に自己決定していくプロセスを感じることができました。受け身な生徒が多い…と嘆く私自身が与えすぎているなあと反省しました。

●筑摩小学校の発表を聞かせていただきました。ひとりの先生の取組が他のクラスへ、そして他の学年へと広がっていったこと。子どもだけじゃなく、教師も主体的に学びシンカしようという姿勢が学校にあることに感心しました。

●リーディングスクール・ラボの際の発表よりも、内容が充実し、発表者の姿からも「やり遂げた自信」のようなものが感じ取れました。特に、主体的に取り組んでいる気概が伝わってきて、他校のことながら、とてもうれしく感じました。

●筑摩野中、開成中の発表からは、どちらも「教師が教える学校」から脱却し、「生徒が学ぶ学校」へシフトするために、授業改善を進めているところが印象的でした。



●同じ単級の中山小学校の実践発表をお聞きして、学年がない分、ややもすると自己流になってしまいが、職員みんな同じ土俵に立ち、研修、研究する大切さを感じました。水曜日の午後を研修の時間として確保し、職員集団が自ら探求的に学ぼうとしている姿、他の学年の授業も一緒に考える姿が素晴らしい、参考にしたいと思いました。

●各校様々な取り組みがありましたが、その取り組みが松本市のめざす「子どもが主人公」というところに集約されている大きなうねりを感じました。そのうねりの中に身をおくことができ、来年度自分の学校でも「さあ、やってみよう」という気持ちになりました。(型ではなく)

●発表された先生方の熱量の高さを感じると共に、一人で動くのではなく、ミドルリーダーを中心とするチームで学校の改革をしていくことの必要性を感じました。研修を通して先生方の意識が変わり、授業改善が確実に前に進んでいるという実践発表はとても刺激になりました。

●リーディングスクールの実践校として1年間自分たちがやってきたことをアウトプットできる場があることに感謝です。自分たちだけでやっていると校内で終わってしまいが、今年は他校の先生方に見てもらったり、見に行ったりすることができたので自分も成長できましたし、本校の先生方が進んで実践できたことが何よりもよかったと感じています。…大きなことをするのはなく、少しやってみようかなとハードルを下げていくことも大切だなと思いました。研究主任だけ頑張ったり、学んだりするだけではなく、全職員を巻き込んで進めることも大切だと気付かされました。

木村泰子先生の講演

「子どもも大人も成長する学校」



●人間として子どもと向き合い謙虚に自己を更新し続けられる存在であるか・・・「子どもに学ぶプロになれるか」この思いが真に共有されると体罰・不登校などの課題に光がさすと再認識しています。教師としての魂のおきどころをお話いただき心に沁みました。

●本校では、昨年度より多様性を包み込み受容する教育に向けて取り組んでいる。木村先生の一つ一つの言葉が心に響いた。何度も振り返って「また明日ね」と言って帰る子、毎朝、保護者と別れるのが嫌だと大泣きする子、来たいときに登校する子などたくさんの子どもの顔が浮かんだ。木村先生のようなゆるぎない強さで子どもを受容し、学校づくりをする姿に尊敬と、そのほんの一部でもいいから自分もそうありたいと思った。

●子どもたちの生の声から、その心の叫びや訴えに対し、教師としてどう向き合うのか、その覚悟や誠実さについて、改めて自分の姿を振り返りました。うまくいかないときに、子どものせいにしていないか、苦しいときこそ謙虚になれるか、そして、学校において一番大事にすべきことは何なのかということが、胸に重く響きました。

●自分の大切にしたいと思っている部分が間違っていたと確信できた時間となった。『教科学習は手段』である。一番大事なことは、『人の力をかりて生きていく力』である。この2つが一番スッと胸に落ちた言葉だった。ぜひ、本校の先生たちみんなに聞いてほしいと感じた。みんなで力を借り合っ、助け合っ、支え合っ、そして知恵を出し合っ働けたら最高だなあと強く感じた。そして、私自身、人の力を借りながら、感謝しながら頑張ろう！と思えた。

●大阪の小学校の様子を聞くと長野県と大きく文化の違いがあるなと感じました。地域によって子どもの教育に差があっはいけないと感じました。大空小学校では大きく改革を起こし、普通の学校にある仕事をなくしたことも印象的でした。担任をなくし、全員で見る学校。全員が同じ目標に向かっていく職員集団など、今までの学校の概念を取っ払った新しい学校だと思いました。大きく変えることは難しいと思いますが、校長、教頭と相談しながら見直さないといけないと感じました。

リーディングスクール・フェス(1月22日)へのご参加、本当にありがとうございました。発表者、参加者みなさんと、素晴らしい学びの場を創っていただきました。先生方の感想から、学びの深さを改めて感じ、紙面の限りシェアさせていただきました。この1年の歩みの大きさを深く実感し共有する機会をいただきました。心から感謝申し上げます。

●「指導」は一瞬で「暴力」に変わる。「何度これをやってきてしまったのだろうと猛省しました。「空気が違う」という学校に来られるようになった子どもたちの台詞にも背筋が凍る思いでした。本校は息がしやすいのだろうか？改めて振り返ってみたいと思います。「普通」をどうやって捨てるのか？ 毎日の課題です。

●大空小学校の子どもたちの「前の学校と空気がちがう」という言葉がとても心に残りました。…自分のクラスを振り返ってみると、苦しい思いをしている子がいるかもしれない、もっと別の角度から子どもたちと向き合う方法があるかもしれないことを感じています。「正解のない問いを問い続ける」ことは、簡単なことではないですが、探究する気持ちは持ち続けていきたいです。



●「子供の学習権を保障する」という最上位の命題のためなら、どんな方法もいとわれないと言い切る、木村先生の強さをあらためて感じ、自身にそこまで言い切れる何かがあるだろうかと自問する時間にもなりました。現在、目の前にいる子供たちの「ために」ということと、子供たちの「立場で」ということの両方を大事にしなが、日々の業務に取り組んでいきたいと思っています。

●木村先生のお話をお聞きして、「見えない部分を見る目、表現できない思いを感じ取る心」が大切だと自分なりに解釈をしました。お話をお聞きした翌日、体育館で思い切りボールを蹴っている男子生徒を目撃しました。普段だったら「何やってんだ！やめなさい！」と一喝するところですが、ふうっと息を吸い込んで、「どうしたの？ボールを蹴らないといられないくらい嫌なことがあるの？」と聞きました。すると、「…実は嫌なことがあって。」と胸の内を話してくれました。きっとこういうことなんだと実感しました。



【4つの力】
人を大切にする力
自分の考えを持つ力
自分を表現する力
チャレンジする力

●最上位の目標は何かという事を全職員が共有すること、ぶれない学校づくりができ、他の事はそこにつなげていければいいという余裕のようなものができる。「一番重要な力をつけること、2番目、3番目の力も自ずとついてくるが、4番目、5番目のことを一生懸命やってもそれ以上に大切な力はない」という言葉もそこに通じていると感じた。

●とても難しいことだと思うが、すべての子どもたちが学ぶ権利を保障する学校の一番の目的を、職員みんなが合意し、学校をつくっていくことがとても大切だと感じた。当たり前どころにもう一度立ち返り、共有していけるような職場になるよう、いろいろな先生方とコミュニケーションをとるようにしていきたいと思う。

●「職員室は、全ての人の“安心基地”。弱みを吐き出せる職員室に。」という言葉は、本校が「探究」を推進するにあたってめざしている「不安や喜びが語り合える職員集団づくり」に通じる部分があり、これまでの取組について、背中を押してくださっているように感じられ、自信をもつことができました。